

旅人気分で歴史散歩 播磨古道

harima-kodo



姫路市



旅人気分で歴史散歩

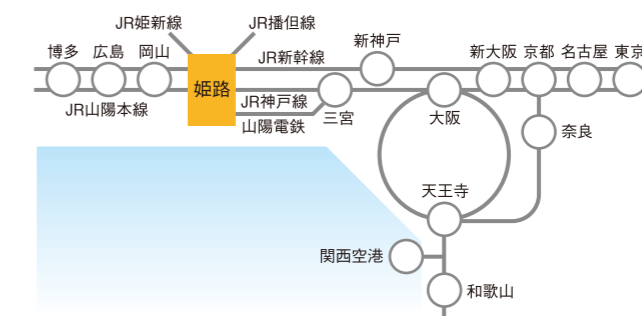
播磨古道



発行：姫路市市長公室企画政策推進室
TEL.079-221-2206
平成28年(2016年)3月発行

■姫路市へのアクセス

- 車で** 山陽自動車道で山陽姫路東、山陽姫路西IC下車、中国自動車道で夢前スマートIC下車または、播但連絡自動車道を経て姫路バイパスの姫路南ランプ・市川ランプ・中地ランプのいずれかで下車し目的地へお越しください。
- 鉄道で** JR各線、新幹線、山陽電鉄(大阪から阪神・阪急電鉄が接続)でJR姫路駅、山陽姫路駅へお越しください。



山陰各地と播磨を結ぶ道

【美作道・因幡街道】

美作道は播磨国と美作国を結ぶ道で、姫路市内においては下野野を分岐点としてたつの市に抜ける山陽道の支路に当たります。古くから美作・播磨の鉄を畿内に運ぶ重要な道でした。現在の佐用町でさらに分岐して鳥取に向かう因幡街道や美作を経て鳥取、島根に向かう伯耆道や出雲道ともつながっていました。

庶民も歩いた物見遊山の道

【山陽道】

もともとは近畿と北九州を結ぶ官道として整備された律令国家最大の幹線道。江戸時代になると西国街道と呼ばれるようになり、参勤交代の大名行列や行商人などが盛んに行き来する五街道に次ぐ重要な街道でした。江戸時代中期になると、伊勢参宮をはじめとする寺社参詣や名所旧跡を訪ねる物見遊山的な旅も庶民の間で広く行われるようになりました。



西国大名の上陸地・室津への道

【室津道】

室津は奈良時代の僧・行基が開いたといわれる摂播五泊の一つです。古くから港町として栄えましたが、江戸時代に参勤交代が制度化されると、多くの西国大名が船旅の起終点を室津としたため、その繁栄は最盛期を迎えました。姫路藩の飛び地であった室津と姫路を結んだのが室津道です。

【浜街道】

室津道からそのまま海側を走り、高砂に向かう道です。小赤壁などの名所があり、多くの旅人が訪れました。

播磨古道を
歴史散歩

東西に山陽道、室津道、南北に美作道・因幡街道、巡礼道…。地方で東西南北にこれほど多くの主要街道が走っていたところは全国でも例を見ません。道はヒト、モノ、カネを運び、各地にさまざまな物語や史跡を残しました。さあ、古道をテーマに歴史散歩を楽しんでみましょう。



近代化・富国への道

【但馬道】(生野道・馬車道)

市川沿いに神前郡(福崎町、市川町、神河町)を抜けて、但馬国へ向かう道を、古くから但馬道(生野道)と呼んでいました。明治時代になると、生野銀山が国営化され、より効率的な銀の産出が求められるようになり、「生野鉱山寮馬車道」(通称:銀の馬車道)が整備されました。馬車道は「日本初の高速度産業道路」として日本の近代化を支えました。



ご利益を求めて歩く道

【巡礼道】

平安時代末期、観世音菩薩が33の姿かたちで民衆を救うという教えにちなみ、33カ所の霊場が札所として定められました。ご利益を求めて札所を巡る経路を巡礼道といいます。姫路市内には第27番札所である書写山円教寺があり、加西市の一乗寺から円教寺を經由して京都の成相寺へとつながっています。





平安時代中期に編さんされた『延喜式』にもその名が残る古社・高岳神社。北側には蛤岩と呼ばれるご神体の大岩があります。江戸時代には山陽道の宿場町として栄え、桔梗屋をはじめ9軒の宿屋がありました。夢前川の渡し場だった場所に常夜灯が残っています。



▲蛤岩 ▲高岳神社



▲常夜灯



小赤壁

荒波に浸食された高さ40m、長さ約800mの断崖。頼山陽がこの地を訪れ、月夜に船を浮かべて風光を楽しんだ際、中国揚子江にある赤壁にちなんで命名したと伝えられています。



松原八幡神社

羽柴(豊臣)秀吉が松原八幡神社を芝原(現・豊沢町)に移すよう命じたとき、黒田官兵衛は松原が由緒ある地であると諭し、神社はこの地にとどまることができました。



国府山城跡

別名、妻鹿城、功山城。天正8年(1580)、毛利攻めの拠点として姫路城を羽柴(豊臣)秀吉に差し出した黒田官兵衛は、父・職隆が隠居していた国府山城に移り住みました。



浜街道を行く旅人もいました



旅人② 伊能忠敬

(1745-1818) 地理学者・測量家

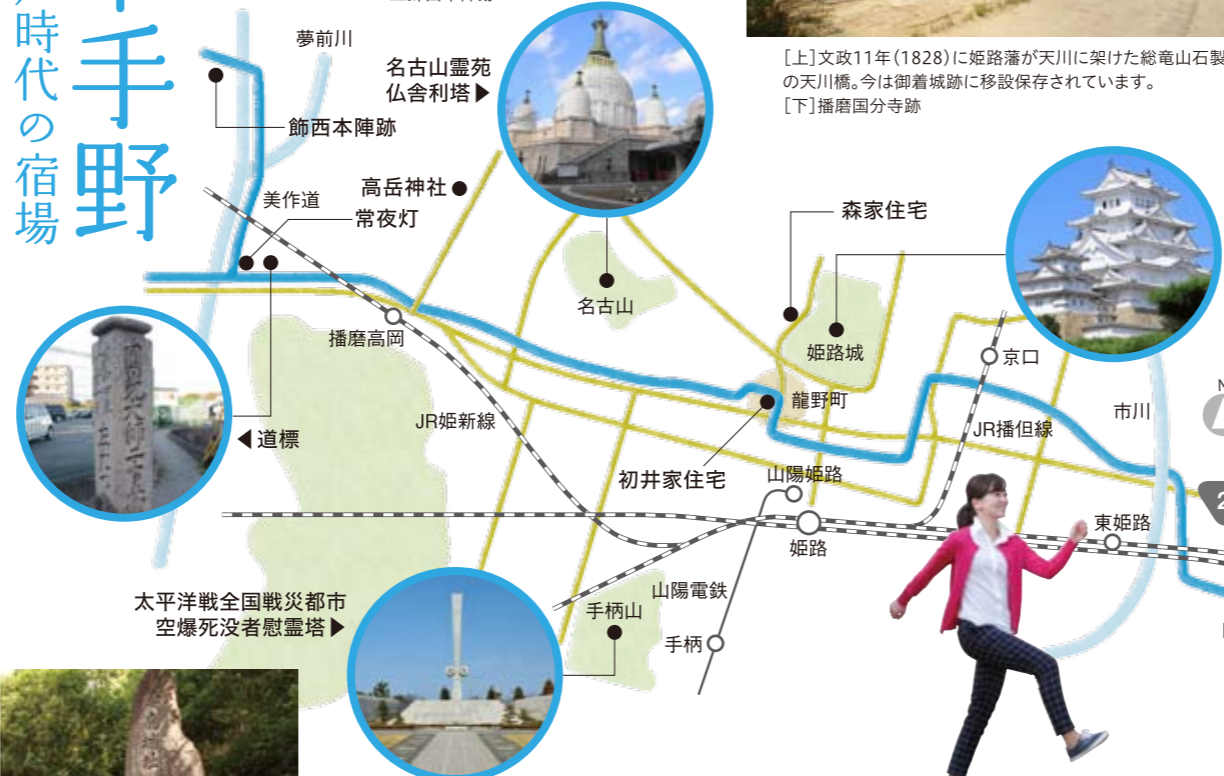
寛政5年(1793)に近所の知り合いと関西方面へ遊覧の旅に出かけ「関西旅行記」を綴りました。姫路城下では福井町の井筒屋に泊まったと記されています。その後、日本全土に及んだ測量の旅でも播磨を訪れ、美作道の飾西宿に宿泊しています。



▲飾西本陣跡

下手野

江戸時代の宿場



太平洋戦全国戦災都市空爆死没者慰霊塔



[上]文政11年(1828)に姫路藩が天川に架けた総竜山石製の天川橋。今は御着城跡に移設保存されています。
[下]播磨国分寺跡

山陽道



▲御着城跡

御着の歴史は古く、奈良時代に聖武天皇の詔により作られた官寺・播磨国分寺跡が残ります。戦国時代、赤松氏の一族である小寺政隆が築城したと伝えられる御着城は、黒田官兵衛が家督を継ぐまで近習として仕えた場所。天正7年(1579)、羽柴(豊臣)秀吉に攻められて落城しました。

御着

官兵衛 ゆかりの地



旅人① 頼山陽

(1780-1832) 儒学者・史家・漢詩人

河合寸翁と親交があり、姫路をたびたび訪れた頼山陽。文政10年(1827)、京都へ向かう途上、六騎塚を訪れこの地で自害した備後守 児島範長を称える詩を作りました。

児嶋範長義に死するの処なり



▲六騎塚

街道を行く。

旅人気分で

山陽道(西国街道)は別所、御着を過ぎて城下へ。今も街道の面影を残す龍野町、下手野、青山を通り太子町、たつの市へと向かいます。



初井家住宅(非公開)

龍野町は、羽柴(豊臣)秀吉が制札を出して、楽市を許した町。その後も商人の町として栄えた街道筋でした。弘化元年(1844)に建てられ、「英賀屋」の屋号を持つ建物は、姫路を代表する文化人、初井しづ枝さんの家。その姿は西国街道の風情を今に伝えています。

龍野町

秀吉が開いた商人の町

一西国街道



▲森家住宅(非公開)

城下を通る西国街道

姫路城下の西国街道は、外京口門から入り、現在商店街となっている二階町、西二階町などを通り抜け、備前門から城下町の外へ至りました。歴史ある神社を訪ねたり、お買い物を楽しみながら、のんびり歩いてみませんか。

旅人④ シーボルト
(1796~1866)
ドイツの医学者・博物学者
文政6年(1823)、長崎出島のオランダ商館付の医師として来日したシーボルト。オランダ商館長の江戸参府の際、室津から陸路をとり、姫路や高砂に立ち寄りながら大阪へ向かいました。その際の詳細な記録は「一八二六年の江戸参府記」に記されています。



備前門橋
平成26年(2014)に、備前門橋の礎石と橋台の一部が見つかりました。参勤交代にも使われた立派な木製の橋だと考えられています。

江戸時代、人相書きなどの角書を記した高札場がありました。城下町で最も多くの人々が往来する十字路に建てられました。

家老河合守翁が財政改革のため設けた切手会所。木綿会所跡

参勤交代の途中で「姫路城下を訪れた大名は国府寺家(本町) 椀箱家(堅町) 那波屋(西二階町)が中心となって務めた本陣(身分の高い旅行者のための宿泊施設)に宿泊しました。

長壁神社
江戸吉原の高尾太夫を落籍した神原政岑が始めたといわれるゆかたまつりは、ここ、長壁神社の夏祭りです

当時としては珍しい二階建ての商家が建ち並んでいたことからこの名で呼ばれたと伝えられます。

これ(市川)よりたづちに望めば、姫路の城の天守高くみわたされて、風景いはんかたなし。

旅人③ 大田南畝
(1749~1823)
狂歌師・戯作者・幕臣
文化元年(1804)、長崎奉行所へ向かった南畝は、旅中にも詳細な記録をとり、行きには「革命紀行」、帰りは「小春紀行」と題する紀行を書き記しました。



▲山口県文書館 宝暦末期(1760頃)

街道絵図の傑作 『行程記』で見る姫路城下

宝暦末期(1760頃)、萩藩の絵図方役人である有馬喜惣太が描いた『行程記』。藩主の参勤交代の際に各地の様子を知ってもらい、旅を楽しませるために作成されたもので、巻首から見ると江戸へ向かう「登」に、巻末から見ると萩へ向かう「下り」になる趣向が凝らされています。



十返舎一九の『播州膝栗毛』

享和2年(1802)、戯作者・十返舎一九(1765-1831)が弥次・喜多を主人公に書き始めた「東海道中膝栗毛」は、大人気となり約20年間書き継がれました。「播州膝栗毛」でも姫路、御着、石の宝殿、曾根天満宮と播磨の名所を舞台に滑稽な物語がつけられています。弥次郎兵衛が姫路城下の宿で旅の娘に夜這いをかけようとしたところ、狸に化かされて大騒ぎに…。



お夏清十郎(「好色五人女」より)

17世紀の半ば、姫路城下で実際に起きたといわれる事件をもとに、井原西鶴が「好色五人女」に描いた「お夏清十郎」。姫路城下の本店・但馬屋の娘、お夏は室津の作り酒屋の息子でありながら、故あって但馬屋の手代として奉公していた清十郎と、禁断の恋に落ちます。二人は駆け落ちしますが、連れ戻され、清十郎は盗みの濡れ衣を着せられて処刑されます。お夏は悲しみのあまり気がふれてしまいました。

の(ば)足(を)せ(ば)



福崎町

民俗学者・柳田國男の生家や姫路藩の大庄屋を務めた三木家の屋敷などが残ります。



市川町

播磨富士と呼ばれる笠形山を有し、自然が美しいまち。県指定無形文化財の獅子舞が今に伝わります。



神河町

西日本では有数の約90haにおよぶスキの大草原が広がる砥峰高原などがあります。



朝来市

織田、豊臣、徳川の直轄鉱山として栄え、明治時代にはわが国最初の官営鉱山となった生野銀山跡があります。



銀の馬車道

明治時代になると、近代化を推し進めるため、政府は生野銀山における銀の増産を計画しました。しかし、当時の銀を運ぶための道は細く曲がりくねった小さな街道だけ。そこで、明治6年(1873)、フランスから招いたレオン・シスレーを技師長として馬車道の工事を始めました。明治9年(1876)、天候に左右されずに馬車が通行できる約49kmの堅固な道「生野鉱山寮馬車道」が完成。当時は頻りに馬車が行き交い、沿線は大いににぎわったといわれます。

北部
『播磨国風土記』の
胄丘の伝説が残る

姫路藩の名家老
河合寸翁
(1767~1841)

文化年間(1804年~1818年)、姫路藩の財政窮乏は深刻になり、藩主・酒井忠道は河合寸翁(道臣)に藩政改革の一切を委任しました。河合寸翁は木綿の専売制などで藩の財政を立て直しますが、その改革の一環として、文化8年(1811)に西光寺野台地で朝鮮人参の栽培を始め、人参役所が設けられました。また、天保元年(1830)には、藩製口ウソクを作るため市川沿いにはげの木を植えたといわれ、その名残の木が現在も残っています。



▲今も市川沿いに残るはげの木



▲人参役所跡



但馬道
(生野・馬車道)



▲甲八幡神社

『播磨国風土記』には、火明命が自分を置き去りにして出発した父・大汝命の船を怒って沈めてしまう話があります。このとき積み荷の落ちた14の丘に、品物の名にちなんだ名前がついたといわれます。青が落ちたことからその名がついたのが甲山。山頂には甲八幡神社が鎮座しています。

▲圓通寺の裏手には、『太平記』の逸話として高師直に追われた塩冶高貞の妻が自害し、火を放った小堂(焚堂)があったと伝えられ、現在は「蔭山焚堂早田妙応夫人の碑」が残ります。

南部
由緒正しい
寺社仏閣が残る

旅人5
貝原益軒
(1630~1714)
儒学者・教育家・本草学者
黒田家の播磨時代を詳しく調査して『黒田家譜』を完成させた益軒。地理、歴史、産業、自然景観、考古遺跡を叙述するスタイルの紀行文を多く残しました。



▲亀山本徳寺

手柄には「亀山の御坊さん」と親しまれる亀山本徳寺や、神功皇后の三韓遠征の際、麻生山から放たれた事始めの三本の矢のうちの 하나가落ちたといわれる生矢神社などがあります。姫路城主・本多政武(忠国)が姫路城の裏鬼門を守るため創建した青山神社も、『播磨国風土記』の胄丘の比定地の一つです。馬車道の終着点である飾磨港には、赤レンガ造りの倉庫が残ります。



▲生矢神社



▲青山神社



生野銀山から飾磨までを結んだ、馬車道の荷卸し設備である飾磨津物揚場跡。馬車道の工事に携わったレオン・シスレーが設計したと伝えられます。

近代化。
富国への道。

飾磨から姫路城下を通って香寺町へ。風土記の丘を訪ねたり、河合寸翁の財政改革や明治時代の殖産興業の名残を感じたり。歴史あふれる但馬道を歩いてみましょう。



くらきよりくらき道にぞ入りぬべき
はるかに照らせ山の端の月



旅人⑦ **和泉式部**
(平安時代中期) 歌人

一条天皇の中宮彰子に仕えていた和泉式部は、彰子やほかの女房とともに性空上人を訪ねましたが、会ってもらえませんでした。そこで、寺の柱に和歌を書いて立ち去ろうとしたところ、歌に感心した上人が呼び戻して丁寧に教えを垂れたという伝説があります。



▲書写山円教寺(摩尼殿)



▲書写山円教寺(大講堂)

巡礼道



▼廣峯神社



廣峯神社の創建は崇神天皇のころと伝えられ、奈良時代末期に吉備真備が唐から帰国した際、神託によって社殿を造営したといわれます。本殿と拝殿は国指定の重要無形文化財。古くから多くの信仰を集めています。

牛頭天王の
総本宮である
廣峯神社



山上に広がる
性空上人が開いた
円教寺

書写

康保3年(966)、性空上人によって開かれた円教寺。天禄元年(970)に現在の摩尼殿が建立され、寛和2年(986)、花山院が行幸された際には、円教寺の寺号を賜り大講堂が建てられました。西の比叡山と称され、史跡に指定されている境内には25件の指定文化財があります。

▼随願寺



聖徳太子の命により
開かれた随願寺

随願寺は聖徳太子の命により高麗の僧・慧便が開基し、天平年間に行基が中興したもので、中世末期には山上に36坊が立ち並んでいました。天正元年(1573)、別所長治によって全山焼失しましたが、天正13年(1585)に羽柴(豊臣)秀吉が再興しました。姫路城主・榊原忠次墓所には、享保16年(1731)に建立された唐門をはじめ、本堂、開山堂、経堂、鐘楼があり、国の重要文化財に指定されています。

播磨路や糸の細道わけゆけば
砥堀に見ゆる有明の月



旅人⑧ **在原業平**
(825~880) 貴族・歌人

貞観17年(875)、随願寺に勅使として訪れていた在原業平は、滞在中に有明峯(増位山の東の峯)で歌を詠んだと伝えられます。「糸の細道」は、砥堀から有明山までの道を指していると考えられています。

網干

歴史と文化に
彩られた

網干の名は、魚吹八幡神社の放生会の日に漁師が殺生をやめ、網を干して参拝したことが由来といわれ、この魚吹八幡神社の門前の道が、室津道(北路)です。国重要文化財の釈迦三尊像と十六羅漢像を擁する大覚寺や、盤珪禅師とその弟子・田捨女にゆかりの龍門寺と不徹寺など数多くの文化財があります。



▲龍門寺



▲魚吹八幡神社

室津道

網干ゆかりの人物 **田捨女** (1634~1698)



盤珪禅師の弟子の中で最も知られるのは丹波市柏原出身の田捨女。捨女は6歳のときに「雪の朝 二の字二の字の下駄の跡」という句を詠んだ俳人です。41歳で夫と死別すると浄土宗に入り、その後、盤珪の門下となって龍門寺の近くに不徹寺を開きました。

旅人⑥ **申維翰** 第9次朝鮮通信使製述官

室町時代に起源をもつ朝鮮通信使も室津から陸路をとりました。室津での朝鮮通信使の応接は姫路藩主の役割でした。第9次朝鮮通信使の申維翰は、ソウルと江戸を往復する約9カ月の旅の日記などを残しています。

西へ東へ。

船旅や寺詣で

西国の参勤交代の大名が通った室津道や
関東からやってきた西国巡礼者が通った巡礼道など
江戸時代になると多くの人が姫路を訪れました。
歴史ある寺社仏閣巡りを楽しんで。



▲室津
江戸時代初期から明治に至るまで、姫路藩が治めた重要な港



▼英賀神社

城下町・門前町として
栄えた
英賀保

英賀城は嘉吉元年(1441)、三木通近が入城して以降、三木氏10代にわたる140年間、播磨地方における経済・文化・宗教の中心地となり、寺内町を構成して栄華を極めました。歴代城主は英賀神社を領内の総氏神としてあがめるとともに、明応2年(1493)には一族で浄土真宗に帰依。英賀本徳寺(英賀御坊)をはじめ多くの真宗寺院が建てられました。天正8年(1580)の羽柴(豊臣)秀吉の攻略により、英賀城は落城。城下町も火の海に包まれたと伝えられています。その後、本徳寺は亀山に移されました。

